



茨城県地域臨床 教育センターだより

2020
Vol.36

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121 令和2年11月1日発行(第36号)

就任のご挨拶



長谷川 雄一

専門領域 ■ 血液凝固異常症、
血栓性素因
造血管腫瘍
輸血・細胞治療

2020年10月から茨城県地域臨床教育センターに配属となりました。元の職場からは、目立たない様になりたい、と考えていましたがメールボックスにも配られますので、この様な形でご挨拶をすることをお詫び申し上げます。

さて、茨城県地域臨床教育センターのミッションは、「茨城県北・県央の地域医療体制の整備」と鈴木保之センター長が示されています。医師・医療人の確保とその方へのスキルアップの援助があって達成される目標だと思います。茨城県の平成30年の人口10万人当たり医師数は全国の下2位で197.5人でした。47位の埼玉県は176.4人、45位の千葉県は201.2人、44位の新潟県で210.5人。人口は埼玉県が全国第5位で734万人、茨城は287万人、千葉県628万人、新潟県は223万人で、それぞれの医師養成校は、1（最近千葉は2となったがまだ卒業生はいない）。埼玉県は医学部が私立1校で人口も多いことと東京が隣にある、という要因が大きいと思われます。しかし千葉県の様に人口が多く東京に隣接しているにも関わらず多くの医師が集まる県が隣にあることは、東京の重力効果として、このランキングの下位に甘んじてはならないことを教えています。

県立中央病院の初期研修医は、full matchしていると思っています。初期研修医の方に対する研修もしっかり行われている、と感じています。初期研修の後の進路をいかに決めるのか、茨城県で働いて頂くか、が目玉しなければならぬ点です。今後諸先生に教えを頂きながら地域での臨床の魅力を高めることに貢献できるよう頑張りたいと思います。その為に、新しい情報を常にキャッチアップし自

分の能力を高めなければなりません。この新しい生活（就業）形態は、足を講演会場に運ばなくても講演を聞くことができる、というメリットをもたらしてくれました。しかし、web toolの活用は一部の職場では簡単ではないようです。院内でWi-Fi等が使えない、回線はつながるがweb meetingできる場所がない、などが理由として上がっています。地域が情報の僻地とならないためには、ネット環境が改善されることなどが研修医を受け入れる県内施設には必要であり、情報を積極的に発信することも今の社会には必要なことであると思われます。

少し、私の思い出を書きます。私は愛知県の出身ですが父は岐阜県土岐市という製陶の町の出自で、私も子供の頃から良く土岐市で遊んでいました。夏には川を堰き止めてつくったプールで泳いだり、陶磁器で出来た人形が飾られるお祭りがあり、懐かしい思い出があります。学生の時に笠間という製陶の町があることを知り、友人の車で、研修医になってからは自分の車で良く山を超えて来ました。何となく土岐に近い感覚を持ったのでしょうか。時々春風万里荘に来て昼寝をしたりしていました。研修医2年目の頃、笠間出身の若い急性骨髄性白血病の患者さんを受け持ちました。残念ながら患者さんは長い闘病の後亡くなれましたが、私にとって笠間はいっそう思いが深い町となり、また、血液疾患に対しても強い興味を持つ一因となりました。千葉教授から県立中央病院での仕事のお話を頂いた際には、懐かしい感覚がある笠間で働くことに感慨深い思いがいたしました。当地に赴任すると現在の職場にはネット環境が整い、急に降ってきた「新興感染症の回復者からの血漿の採取体制の構築に向けた研究」（松下班研究）の分担情報を集めることが可能になっています。情報を集めることが出来なかったら、爆弾のような課題に吹き飛ばされていたのでは、と恐ろしい思いがします（コロナがこんな形で災いをもたらすとは、）。)

この恵まれた環境を活用させて頂き、私の好きな笠間の地で働かせて頂くことに感謝しています。今後とも、ご指導・ご鞭撻を頂けますようお願い申し上げます。

Cell Nature Scienceを出す方法考察



教授

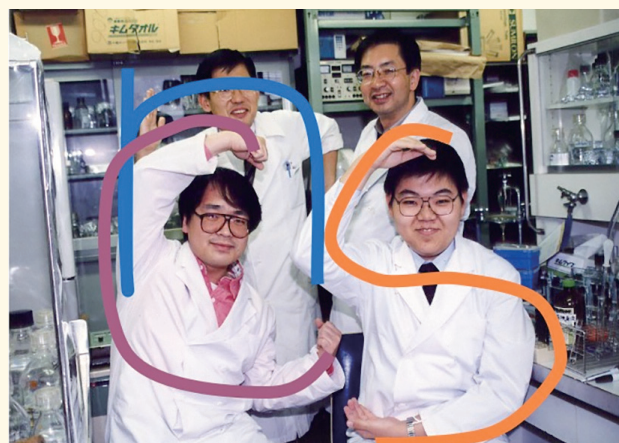
柳川 徹

専門領域 ■ 歯科口腔外科

—最後のダブルライセンス CNS攻略編—

今回は、数多くの一流の研究者のいる筑波大の中で私などが書くのは明らかに僥倖な話ですが、後世の筑波大の皆さまのために、自分の愚かな体験から得た、ドシロウトからCell Nature Science (以後CNS) を出す方法について書かせていただきます。あくまでも、自分の勘違い？はすさまじく、ウルトラパカであることを念頭にご無礼をお許しください。やはり、多くの研究者のあこがれは、CNSに出すことで、私もその1人でした。さて、筑波大に来て見ると、当時、柳沢・櫻井教授(現ⅢS)のエンドセリン伝説まっただ中で、凄い人がいるということでした。しかし、こちらも自称「日本の歯科界の頂点」なので、CNSなしでは面目が立ちません。かくて、大学院時代、生化学の石井哲郎教授(当時准教授)のところに行き、CNSを書くそと意を決したのですが、今思い起こせば、周囲にCNSを出したことがある人などまるでいない、あまりにもマイナーなラボ。そこで考えたのが、時代を先回りする作戦でした。すなわち、時代の流れを予測して、全く何も知らない物質の解析すれば、そのうち科学の進歩によって解明されて脚光を浴びるだろう。で、当時、石井研でクローニング途中だったA170と名付けた全く無名の酸化ストレスタンパク質を解析し始めました。しかし、どう考えても箸にも棒にもかからない内容をNatureに出すと騒いでいるのですから明らかにアホです。でも、論文を作り、Natureに出す方法を教えてもらうのだと、当時いらした中内啓光教授(現スタンフォード大)に石井先生と意見を聞きに行ったのでした。当然、完全に笑われて、Scienceのアクセプト原稿をちらつかされて軽く一蹴されて帰ってきました。もちろん、論文は一瞬にしてエディターキックでBBRCでした。数年後、TARAセンターに山本雅之教授(現東北大)がいらして、偶然にも、A170などの酸化ストレスタンパク質が転写因子Nrf2の下流にあるということが解り、今度こそはNatureに載せると言って、結局、振り返りでJBCでした。山本先生からも明

らかに軽く見られており、「いやあ、ノックアウト(KO)マウスですよ!」と、できっこないことを言われ、これまたズブシロの私は、意地になって科研費のほとんど全部外注に投入してKOを作った訳ですが、そこで、またしても、全く同じKOを作っていた海外のラボにCell metabに出されて完全に落胆しました。と、12年後、都の臨床研の小松雅明教授(現順天堂大)より、オートファジー因子のLC3と結合するらしいとのことで解析をしていただいたら、なんと選択的オートファジーの重要な役割を果たしているのがp62(=あの冴えないA170)で、Cellに共著者で入れていただきCNSの首を討ち取ったということになりました。2016年のオートファジーのノーベル賞は記憶に新しいと思います。しかし、今、反省してみるとCNSに至る道というのは、こんなおろかな手段を使わなくても、簡単な方法があることが解ってきました。CNSを出しそうな外国のラボに留学すれば、非常に高い確率で出ます。日本の古い名門大学は、そういう名門ラボにコネがあって、そこに留学すると容易にCNSに近づけるルートを知っているようです。実際、私の同級生の16回生の田淵克彦教授(現信州大)は、櫻井教授のアドバイスを聞いてUTSWのProf. Sudhofのボスドクになり、ScienceのArticleにファーストオーサーで出し、ついでにそのボスは2013年にノーベル賞まで取ってしまいました。CNSの出し方は、実はもっと効率的な正攻法というのがあるようです。とすると、オリジナルであそこまでいけるⅢSの柳沢・櫻井先生は本当に天才だったのだと25年かけてやっと気づいた訳でした。多くの夢をもつ研究者の皆さまは良い研究をすることは最も大切ですが、このようにCNSに出す方法論について考えるのも一案でないでしょうか。



1995年当時 大学院入学当初CNSポーズを構えている石井研究室。Sポーズの17回生の清田純先生も、Natureにたどり着きました。

筑波大学
University of Tsukuba

筑波大学附属病院 茨城県地域臨床教育センター

〒309-1793 茨城県笠間市鯉淵6528 ☎0296-77-1121

ホームページ <http://www.hosp.tsukuba.ac.jp/chiiki/cyubyo/>

茨城県